

語り手と教訓

昔ばなしにはしばしば末尾に教訓がついている。教訓的昔ばなし、あるいは昔ばなしの教訓化はたいてい昔ばなしそのものをつまらなくするように思われるためか、従来昔ばなしの末尾の教訓は、昔ばなし研究の対象にはされなかったようである。しかしその教訓は、一種独特な架空の世界をなしている昔ばなしの世界と、現実社会とを結びつける橋とでもいうべきものであるし、それを通じて語り手と伝承の昔ばなしとの関係をさぐることができるように思われる。また語り手が、自分の管理する昔ばなしをどうとらえているかを知る手だてとしても、それは研究の対象たりうると思う。この小論はいわば昔ばなし伝承のプロセスの

一面を究明するために、末尾の教訓を吟味してみようという試論である。

小 沢 俊 夫

教訓には「だから人間は……してはいけない」というような道徳律型と、「人間というものは……なものだ」というような、人生の真実を教える型とが観察される。ドイツ人のことは使いでは前者は *Moral*、後者は *Lehre* とよばれるが、日本語ではひろく両者をふくめて教訓とよぶことができると思われるので、さしあたりこのことばを使うことにし、両者を区別する必要の生じた段階でわけることにする。

ここで問題にされるべきことは、昔ばなしの教訓は、語り手の恣意によってつけられるものなのか、昔ばなしと一体となって伝承されるものなのか、ということである。この問題の解明にいたるために、つぎのような諸問題が検討されるべきであろう。

一、口承文芸のジャンルによってつぎの区別があるか。
イ、必ず教訓がつく。ロ、決して教訓がつかない。ハ、教訓がつきやすい。

あるいはまた、同一ジャンルのうち、タイプによってこの三種の区別があるか。

二、語り手の性格や個人的背景は教訓の形成と内容に関与するかしないか。するとしたらどの程度するものか。

三、教訓は重層的に伝承されている昔ばなしに多いか、孤立的伝承に多いか。このことはそれぞれの昔ばなしの内容とも関連して考察されなければならないだろう。

四、昔ばなしのタイプと教訓の内容との関係。

五、昔ばなしの内容と教訓の内容との対応は正確におこなわれているか。

六、教訓は整った形で語られているか。

七、教訓の内容の特徴。

八、教訓の内容は、昔ばなしが語られる場のもっている機能に対応しているかどうか。

九、語り手のレパートリーと教訓。

第一章

さてこれらの問題を検討するについて、この小論では、ふたつの、性格のことなる昔ばなし集をとりあげることにする。そのひとつは、稲田浩二・福田晃編「蒜山盆地の昔話」(三弥井書店、昭和四三年)であり、その二は武田正編「木小屋話」(桜楓社、昭和四六年)である。

「蒜山盆地の昔話」は岡山県真庭郡八束村と川上村で一九五八年から六七年にかけて、(主として六六年、六七年に)採集されたものをすべてを採録、または言及している。昔ばなしの背景をなす両村の歴史と生活については、編者による解説が詳しくおこなわれている。ここではこの試論に必要な最小限の事柄のみを記すこととする。

この両村では、ジゲを単位として生活がおこなわれ、さらに、クミとよばれる地縁集団にわかれる。他方、「アダチ」「ヨリアイツケ」「カブ」などとよばれる同族集団もあ

る。血筋の関係を重視する「モットウ」とよばれるものもあつた。生業は水稲耕作とたばこ栽培が主である。

採集の対象となつた語り手は男三八名、女二九名、計六七名。年齢は、一九六七年現在で、八〇歳以上男四、女二七〇歳台男一六、女一三、六〇歳台男一三、女八、五〇歳台男三、女三、四九歳以下男二、女三名で、最年長八六歳、最年少三九歳である。そして多数の昔ばなしを語つた人は、いずれも六〇歳以上である。その例をあげれば、

池田たきの 四九話、小谷いせよ 二一話、美甘寅一 二一話、長尾清治 二〇話。

語り手はほとんどが農業を生業とするもので、ごく少数の大工、民芸品製作者がいる。そして採集当時なお子供や孫に昔ばなしを語る生活を保っており、語りの座に自信と誇りをもっている。

この村々には他からの移住者が少ないので、むかしの重層伝承の様相がみえる。そして家系内の伝承における横座の語り手が優勢である。編者は語り手池田たきの姫の伝承系統図をもつてそれを具体的に示している。

両村で採集された三七九話中、四話以上重層的に伝承されているものはつぎのとおりである。

本格昔ばなし

二〇話 一四番、瓜姫御寮（たきの）

一四話 五四番、鼠の餅つき（たきの）

一三話 四四番、山ん婆と馬子どん（たきの）

一二話 三四番、取りつくひつつく（たきの）

八話 五六番、竹伐り爺（たきの）

四九番、化け物問答（たきの）

六話 五五番、ごろ太郎（たきの）

四話 一五番、五分次郎（たきの）

二八番、お銀小銀

七〇番、目の願（たきの）

因縁・化物話

五話 九四番、山伏と狐

笑話

八話 一〇三番、おおせいざ（たきの）

七話 一三五番、団子罎（佐治谷話）（たきの）

一三四番、おちよの化物（佐治谷話）（たきの）

一一七番、長頭を回せ（佐治谷話）（たきの）

四話 一〇六番、盲とびこと鼻欠げの伊勢参り（たきの）

果なし話

一〇話 一五〇番、天からふんどし（たきの）

六話 一五三番、蛇の天昇り

五話 一五二番、栗の実

これらの合計は一六二話であり、これは総話数の約四三パーセントにあたる。かなり強い重層性ということができよう。そして全体としても多く語った池田たきの壺のレパトリーとなつてゐるものをカッコ内で示したが、ここにあげられた一九タイプ中一五タイプが彼女のレパトリーのなかにあることがわかる。

さてこの昔ばなし集に収められているものをジャンル別に概観するとつぎの如くである。

動物昔話 一三タイプ、四〇話

完形昔話 六二タイプ、一七六話（ただしこのなかに

和尚と小僧型が一タイプ、一六話ふくまれている。）

笑話 四七タイプ、九五話（うち佐治谷話とよばれるもの、二三タイプ、四八話）

因縁・化物語 九タイプ、一五話

形式譚 一二タイプ、三四話

不採用とされ備考資料としてのみ言及されているもの

一五タイプ、一五話。総計一五八タイプ、三七九話である。

さてこれらのジャンルのうち、教訓を決してもたないものがある。それは、

(一) 和尚と小僧型、これは本書において完形昔話のなかのタイプとして扱われているが、ほとんど一つのジャンルと考えてよからう。

(二) 佐治谷話、これは笑話のなかに入れられているが、やはりほとんどジャンルとして考えられてよいだろう。

(三) 形式譚、これには果てなし話と短い話があるが、いずれも教訓をもたない。

これらがなぜ教訓をもたないか、を考察する必要がある。和尚と小僧型のむかしでは、小僧がある種の機智で和尚をやりこめるということに、むかしとしての興味は集中しており、語り手にも聞き手にも、それ以外の要素をそこに混入させる余裕もないし、必要もないのではなからうか。佐治谷話のばあいにも事情は同じものと思われる。佐治谷の人々の愚行のみがそこで期待されているのである。この二つのジャンルは、小僧の機智、村人の愚行といういわばカプセルのなかにとじこめられていて、教訓をと

りこむ余地はない、といえるであろう。このことは、のちに比較する「木小屋話」における、「長手の伊佐」「佐兵ばなし」などにおいてもみられるところである。

果なし話と短い話に教訓がつきえないのは、両者とも、いわばことばのあやで語ってきかせる態のものであることを考えれば、おのずと理解されよう。

さて上記の各ジャンルのなかで、どの類話も必ず教訓をもっているというものはない。そして完形昔話のなかでは、教訓を多くもっているタイプと、教訓を全然もっていないタイプがあることがわかる。

教訓をもたないタイプから検討すると、上記の如く、完形昔話のうち四話以上重層的に伝承されているものは一〇タイプあるが、このうち「瓜姫御寮」「山ん婆と馬子どん」「化物問答」「お銀小銀」には教訓をもっている類話はない。このうち前三者は相当強い重層性をもっていることはすでにのべたが、それにもかかわらず、ひとりの語り手も教訓をつけていないということは、一方では、むかしの内容によって教訓がつきにくいのであろうことを、他方では、教訓をつけないという伝承の拘束性はかなり強いものであることをわれわれに暗示しているといえよう。

重層的に伝承されている完形昔話の残る六タイプのうち、教訓を多くもっているものはつぎの三タイプである。

「ねずみの餅つき」 一四類話中、人まねはいかん、という教訓をもつもの六話、その教訓への傾斜を示すことばのあるもの一話、欲深はいかん、という教訓のあるもの一話。

「竹伐り爺」 八類話中、人まねはいかん、という教訓をもつもの五話、それへの傾斜を示すことばのあるもの一話。

「目の願」 四類話中、欲ばりはいかん、という教訓のあるもの二話。

重層的に伝承されている完形昔話の残り三タイプは、一類話にしか教訓をもっていない。

「取りつくひつつく」 十二類話中一話にのみ教訓、人まねはいかん。

「ごろ太郎」 六類話中一話にのみ教訓、人まねはいかん。

「五分次郎」 四類話中一話にのみ教訓、おごる者久しからず。

さて本書のなかには重層的というほどではないが、同一

タイプについて二話、三話の採集もある。⁽¹⁾ それらのうち教訓をもっているものはつぎのとおりである。

「舌切雀」 三類話中一話に教訓、欲すれば罰があたる。

「難題簪」 二類話中一話に教訓、知恵のあるものにはかなわない。

「笠地藏」 二類話中一話に教訓、欲深はいけない。

「横着者の出世」 二類話中一話に教訓、生き物を助ければ、良い暮しができる。

さてつぎに、一話しか採集されていない、いわば孤立伝承のばあいを見ると、採集されている三七話中、末尾に教訓をもっているものは七話である。

一六番「牛の嫁入り」「やっぱ悪い事ならん。正直せにやらん。」

三六番「天狗の若返り薬」「あんまり欲うして、一つ兎へなってしまうた。」

三七番「お大師さまの適えごと」「あんまり我欲な事う、考えるもんじゃあないぜ。」

三九番「大歳の貧乏神」「そういう貧乏をしても、そういう真心をもって人を迎えるいう事なあ、ええ感

じを与えるというような、まあ、お伽噺をきいとる。」
四〇番「乞食の恩返し」「人はその、しられる折にや人に親切しとかにやあいけんもんだ言うてなあ、話を聞きよりましたなあ。」

五七番「狐地藏」「そいで、なんでもかんでも欲深かあして、人の真似しうりや、罰が当たって、そういう目になる。」

七二番「横着者の話好き」「そえじゃけえなあ、人の話いうもなあよう聞いとらにやあいけんだぜ。そがあな良えことがあるけえ。わかったか。」

完形昔話のうち教訓をもっているのは以上ですべてである。孤立伝承の七話についてのみ逐語的に引用した。他のばあいの個々のことば使いなどは、後述の、話者についての検討の部分で扱うこととする。

完形昔話以外では、動物昔話、笑話(佐治谷話を除く)、因縁・化物話においてわずかながら教訓がみられる。

動物昔話

一番「尻尾の釣」四話中一話に、人を騙すなどの教訓。

九番「古屋の漏り」「昔にやあ利口な人がおいでたとや。」(類話(1)(2)は編者により「例話に同じ」と記され

ている。これは本文全体、すなわち「昔にゃあ……」を含めて同じという意味と解してよいようである。

笑話（これに含まれている佐治谷話には教訓がつかないことはすでに述べた。）

九六番「誰なら尻」知恵のある者はそがぁなもんだ。」ただしこれは特に教訓というほどのものではなく、尻の栓に使ったイモを、そしらぬ顔をして子供にやれと言ったことについてそう言うまでのことである。

一〇八番「長い名のこども」「それで長い名はいけんという。」これもはっきり教訓の形をとっていない。しかし、のちにみる木小屋話においてもこのタイプには、長い名はつけるものでないといういわば教訓的なことがみうけられる。

以上が本書に教訓として、あるいは教訓らしきことばとしてあらわれるもののすべてである。個々の話者についての検討に入る前に、ここまでの事実について考察をしておこう。

まず目だつことは完形昔話の重層伝承的なむかしにおいて、人まねをしてはいけないという趣旨の教訓が多いことである。

五四番「鼠の餅搗き」「そえて人真似をするもんじやない。人真似ようすりゃあ、命いかかわる、いうむかしです。」（加藤延一郎）編者によれば類話(2)、(4)、(8)、(12)、(13)においてこれと同じ教訓がつく。(6)においては、隣の婆が鼠にかじられて逃げ帰り、「もう人真似はしない」と、近所の人言う。これは教訓とはなっていないが、それへの傾斜を示しているといえよう。

五六番「竹伐り爺」編者によれば類話(1)、(2)、(4)、(7)において、人まねはいけないという教訓がつき、(3)では人真似をすれば尻を切られるという教訓がつく。そして(5)では、むかしのなかで爺が、人真似はいけない、と言うとのことである。これもいわば教訓への傾斜といえよう。

類話として梗概のみがのべられているばあいには、教訓のことば使いそのものは知るよしもないが、加藤延一郎の教訓について、二点を指摘しておきたい。第一に、彼はむかしそのものを「お婆さん死にやあせなんだけえども、ほうほうの体で、上がって来て、戻った。」とはっきりしくくってから、「そえて人真似を……」と教訓をきりだしている。この際注目しておくべきことは、むかしをはっきりしめくくすることと、「そえて云々」と一般化した形で教

訓を形成することである。のちに語り手についての分析においても指摘するが、このことは教訓として必要な条件のひとつであると考えられる。

第二に、「……命いかかわる、いうむかしです。」という教訓のしめくり方は、これが話者自身の創作や恣意的なつけたしでないことを示している。後述の「……だと。」「……だとや。」に感じられる伝聞性と同じ方向を示している。教訓の内容がステレオタイプであることと呼応して、語り口の面から、この種の教訓の超個体的伝承性を示しているということができよう。

これに対して、べつな意味でめだつもうひとつのことは、孤立的伝承のなかの七篇についている教訓の多様性である。「正直せにやあならん。」「真心をもって人を迎えるいう事あ。」「しられる折にやあ人に親切しとかにやあいけん……。」「人の話いうもなあよう聞いとらにやあいけんだぜ。」等々、語り手によって多様な教訓をつけている。これらはその内容からみても、また教訓としての語り口からみても、語り手個人の性格や人生的背景、好みなどが反映しているとみることができる。この点についても、個々の語り手を検討する際、もう一度ふれることにする。

語り手についての検討

本書に語り手として登場する者の総数六四名、そのうち完形昔話を語っている者四九名、動物昔話、笑話などのみ語って、完形昔話を語っていない者一五名。総数のうち教訓をつけた者二一名。完形昔話を語った四九名のうちでは、教訓をつけた者一九名。完形昔話を語っていない一五名中、動物昔話に教訓をつけた者二名。この二一名について検討をするが、ここでは特に注目すべき語り手についてのみのべることとする。

池田たきの 完形昔話二四話を語り、七話に教訓。笑話一二話を語り、一話に教訓。因縁・化物ばなし一話、短いはなし三、果なしばなし二話、不採用一話。

三四番「取りつくひつつく」一二類話中、たきの嫗のみ教訓をつけている。「……焼け死んでしもうた。そえで人まねようすりゃあ、こんな目へ会うけえ、必ず人まにやあせられんとかや。」ここで観察されることは、むかし自体をはっきりしめくくっていること。それから「そえで」で一般化した形の教訓をきりだしていること。末尾に「……とかや。」があって伝聞性を示していること。すなわち、話者

の強い主張として教訓をのべずに、世間一般で、または代々そう言っているぞという、いわば超個体的な、間接的主張というべきものである。また、むかしの内容と、教訓の内容が一致していることも指摘さるべきであろう。教訓をめぐる形としては、完全といってよいばあいである。

五二番「舌切雀」 三類話のうち一話は前半のみの断片中、たきの姫のみが教訓をつけている。「爺さんが手をひっぱって、連れていなさったげな。欲うすりゃあ、そがいな罰が当たるとな。」ここには「そえで」という一般化するこゝとはないが、むかし自体をはっきりしめくくり、教訓の末尾に「とな」をつけて伝聞性を示し、内容もむかしの内容と一致しているという意味で、整った教訓である。しかしたきの姫のむかしが必ず整った教訓をもっているというわけではなく、つぎのようなものもある。

四一番「笠地蔵」 二類話中たきの姫のみが教訓をつける。婆がもっと米を出させようとして、地蔵の鼻に火箸をつっこむと、「米よう出さんようになってしまつて、あんまり欲うすりゃあ、なんでも罰が当たつてそがあなもんだとな。」ここではむかし自体の終わりと、教訓の初めは前二例ほど明確ではない。しかし語り手の気持としては一般

化した形で教訓をのべるばあいに近いことは想像できる。末尾には「とな。」があつて伝聞性を示しているし、むかしの内容と教訓の内容は一致している。

五五番「ごろ太郎」 六類話中たきの姫のみ教訓をつける。「そしたところが、殿さんが、『贗者が』言うて、尻ゅう切られて、そえで『人真似ようすりゃあ、尻を切られる』いうことが始まっただとな。」ここでもむかしの終わり、教訓の初めは前例と同じく明瞭でない。そして、教訓をそれ自体としてのべないで、教訓の由来をのべる形にしている。

一八番「難題掣」 「その者が、『小鳥も、小羽根はえて立つときは、高きもみじも下に見る』言うて、そえでどうとうその掣いなつて、体駆あ小もうてもどがいでも、知恵のある者にゃあ勝てんとな。」ここでもむかしそのものの終わりがはつきりしていない。そしてこれは果して教訓といつてよいものかどうか疑問である。むしろこのむかしを通じての語り手の感想に近いといえるかもしれない。かろうじて「とな。」によって語り手個人のものでないという語り手の意識が感じられる程度である。

たきの姫にも以上みてきたように、教訓としてとらえら

れるにはぎりぎりの限界近くにあるような語り方が観察されるが、しかし一方、前述のように整った語り口でむかしを終え、教訓をもっとも典型的な形で語っているのも彼女である。そのことは、彼女が、編者による家系伝承図でもわかるように主として家系伝承のなかに居り、全体的にみてよい語り手であることと無縁ではないであろう。

池田君代 完形昔話一三話を語り、三話に教訓。笑話五話を語り、教訓なし。

一六番「牛の嫁入り」 孤立伝承。「しごへならん、しごへならんことをしてもいけんし、そこから神様を頼んどつたら、おかげがあつて、そがあななんだ殿様のうちのほうに行くしただけえ、やっぱし悪い事あならん、正直にせにゃあならん。」すっきりしない終結部である。話者は善悪の対照をつけているつもりなのであろう。しかし神様を頼んでいると殿様のうちのほうへ行くということも論理的でないし、神様を頼むことが、正直にすることなのだというのも、必ずしも直結したこととは思えない。形式の面からみても、むかし自体のしめくくりがはつきりしていないし、教訓を一般化することばがない。末尾の「とや」にあたるものがなく、語り手の直接的な、粗野な表現となった

まま終わる。このような点を考えあわせると、この教訓は伝承的なものとは思えない。

三七番「お大師さまの適えごと」 孤立伝承。「あんまり欲う考えてとうとう、馬が一匹死んだぐらいだ。あんまり我欲な事う、考えるもんじゃあないぜ、いうて。」このむかしでは金持が欲深い考えをおこして、乞食にむりな願いをするという構成なので、末尾における教訓もそれに応じて欲深はいけないというのは自然であろう。そのばあい対立を隣人のなかにおかず、金持と貧乏人という関係のなかにとらえている点が、「人まね」の教訓となじまない理由であろう。日本に多い隣人型の昔ばなしのなかにあつて、興味深い類話であるが、このことについては改めて論じる機会をもちたいと思う。

教訓そのものについて言えば、一般化の気持はあまり感じられず、「いうて。」という末尾も、たきの壺における「とや。」ほど伝聞性を感じさせないのは、その前の「……ないぜ、」つまり語り手自身のものとして言っている気持が強いからであろう。

美甘寅一 完形昔話一三話を語り、一話のみに教訓。笑話二話、因縁・化物話一話、いずれも教訓なし。

三六番「天狗の若返り薬」 「嬬あが貰い乳ゅうして、と

うとう吾助を大きくしようしてしもうた。あんまり欲うして、
つい一つ児へなつてしもうた。」これを教訓としてとらえて
よいかどうか、まず疑問である。それは、前述のような
教訓としての形を、全然もっていないことからくる。ことば
の面からみても、「欲うして、……なつてしもうた。」は事
実の記述である。したがって教訓としてとりあげなくても
よいのであるが、語り手の気持から考えれば、教訓とし
ての意識はないまでも、このむかしについてのしめくり
の感想といったものである。内容的には他の多くの
話者の教訓にみられるものと同じものを、この話者は感想
として語っているといえるわけで、教訓と感想の漠然とし
た境界線上にある例として興味のある一篇である。この語
り手は、一三タイプの完形昔話を語りながら、教訓らしい
ものはこの一篇であつて、あまり教訓を好まない性質のよ
うに思われる。量的に言えば、語っている完形昔話に対す
る教訓の割合は八%で、この割合は、教訓をつけている人
のなかで最低である。しかも教訓というより感想というほ
どのものであることは既述のとおりである。

入沢みちよ 動物昔話一話、完形昔話四話、うち教訓二

話。佐治谷話一話、因縁・化物話一話、これに教訓をつけ
る。

七二番「横着もんの話好き」 孤立伝承。「そえじゃけ
えなあ、人の話いうもなあよう聞いとらにゃあいけんだ
ぜ。そがあな良えことがあるけん。わかつたか。」ここ
には伝聞性を感じさせるものはなにもなく、語り手自身の考
えが前面にでて、聞き手に自分の教訓をおしつけようとし
ている。「わかつたか。」は特にそのことを示している。

むかしの内容は、この教訓とほとんど関係がない。もし
むかしの内容に即して教訓をひきだすとしたら、「一見つ
まらない話でも、あとになって正しいということが経験的
にわかることがある」というようなもののはずである。そ
もそもこのむかしの終結部の語り方は、相当に不明確であ
る。語り手は、横着者が心をいれかえて良い若者になつた
その動機を何にしようかと迷いつつ語っているようにさえ
思われる。そして最後に前記の教訓をつけて、「わかつた
か。」と念を押している。これは語り手が教訓を恣意的に
つけている典型的な例ということができよう。この語り手
は若い、あるいは幼い聞き手に対して教訓を与えることが
好きなのではないかと思われる。レパートリーに対する教

訓の割合は五〇パーセントで、話者中最高である。

三五番「横着者の出世」 類話二、入沢のみ教訓をつける。「酌取りさんに、『どうぞ』言うて盃を出いたところが、それがその家の娘で、とうとう躰へなつて、横着者でもなあ、生き物を助けたりしてやっときゃあ、一度良え暮しゅうして、ええ躰さんになつたとや。」これを教訓としてとらえてよいかどうか疑問である。それはまず、むかし自体の終わりと教訓の初めの区切りがない、一般化がない、その逆にええ躰さんになつたという具体的叙述のくり返しが、教訓らしきものの末尾についている、などからくる疑問である。末尾の「とや。」も、このばあいには躰さんになつたというむかしの伝聞性を示すためにあると理解したほうがよさそうである。だがしかし、「横着者でもなあ、生き物を助けたりしてやっときゃあ、一度良え暮しゅうして、」という部分には、この語り手の教訓好きの気持がありと感じられる。

語り手入沢みちよにおいて観察されるもうひとつの特徴は、主人公として「横着者」を好むらしいことである。このタイプの主人公としては必ずしも横着者でなくてもよいはずだが、彼女は横着者として設定している。彼女の教訓

には人まねはいかん、というのもないし、欲ばりはいかんというのもない。五二番「舌切雀」では、池田たきのなどは欲すりゃあ罰があたるといふ教訓を入れているし、このむかしの内容からして、こういう教訓はつきやすいと思われるのに、入沢はこの「舌切雀」を語りながらその教訓をつけていない。この人の教訓感覚はそれらに関心がなく、横着者が何かのきっかけで心入れかえて良い人間になるという点に集中していたといふことができるだろう。

語り手入沢みちよは、前記美甘寅一とちょうど逆に、教訓をつけることを好み、しかもそれが個人的色彩の強いものであるといふことができるだろう。個人的色彩が強いといふことは、池田たきのの教訓にみられた超個体的伝承性の、ちょうど逆をなす性質であるといわざるをえない。

加藤延一郎 完形三話を語り、うち一話に教訓。笑話一話。

五四番「鼠の餅搗き」 類話数一四、うち七話に人まねはいけないといふ教訓。加藤延一郎はそのうちのひとりで、前述のとおり、むかしのしめくくりをはつきりおこない、「そえで」で一般化した形の教訓を説きおこし、「いふむかしです。」で伝承性を明らかにしている。これは池田

たきの例においてもみたように、教訓の整った形ということが出来る。そのことは、これまで挙げた、整っていない形の教訓と比較すれば明らかに理解されるであろう。

西井むめ 完形六話を語り、うち一話に教訓。笑話一話、それに教訓をつける。因縁・化物話二話、短い話一、果なし話一。

四〇番「乞食の恩返し」 孤立伝承。「……大変に暮し
がようになって分限者へなられただいうてなあ。人間はその、しられる折にや人に親切しとかにやいけんもんだ言うてなあ、話を聞きようりましたなあ。そいでその家はなあ、いまだに身上が良えそう言うてなあ。」ところがこのむかしの内容は、「しられる折には」ということばに应ずるものではなく、もし内容に即して教訓を形成するとしたら、「人のいやがるような親切をすんですることはいいことだ」というようなものになるはずである。このようなばあいは、むかしと共に伝承された教訓とみるよりは、この語り手自身に由来するとみるほうが妥当であろう。しかもそれは教訓というよりは語り手の感想という程度のものである。したがって「話を聞きようりましたなあ。」はまさに「話」全体にかかっているのである。

九六番「誰なら尻」 類話三話、うち西井むめ嬢のみ教訓らしきものをつける。これは笑話として分類されているものだが、この語り手の、はなしの内容から少しずれた教訓(めいたもの)をつける特徴がここにもみられるので、並記しておく。『そえでおまけに、さつま芋一つ落といとりました。こりよう子どもさんに上げるけ、持って去にんさい』いうたとやあ。あの知恵のある者あそがあなもんだ。』ところが「知恵のある」というのはこの笑話の末尾で、尻の栓に使った芋を何くわぬ顔をして子供にあげる、という点についてのみ妥当なことであって、この笑話の本筋は、尻による泥棒の撃退なのである。むかしの終結部のみをとりだして、そのことに対する教訓をのべるといふ現象の例であるが、このことは、他の語り手においても若干みうけられる。このようなばあいは、語り手が偶然的、恣意的につけた教訓(ないし感想)と考えてよいであろう。

「蒜山盆地の昔話」に登場する語り手にすべて言及したわけではないが、以上でこの資料における語り手・タイプ・教訓の相互関係は大体あきらかになったと思う。「木小屋話」の検討に入る前に大まかにまとめるとつぎのように

なる。

この地区の昔ばなしに重層的伝承が多いのは、編者のいうように語り手が同一生活圏内者であることからくるだろう。そして家を伝わり、主として「横座」の語り手によって伝承されることも作用しているだろう。そうした重層伝承的むかしにおいては、内容からして教訓を受けつけないタイプがある反面、教訓となじみやすいタイプもある。そのばあい教訓の内容は、むかし自体の内容と対応している。そして、その内容は、どの類話でも同じであることが多く、教訓自体の超個体的伝承性が感じられる。それに對して孤立伝承のばあいには、教訓の内容は多種多様で、伝承性よりも、当の語り手の好みや性格、人生的背景などが反映しているように思われる。そのばあいにはしばしば教訓は、むかしの内容と正確に対応していないことがある。

第二章

「木小屋話」は山形県米沢地方でとくにその名でよばれている昔ばなしを集めたものである。編者の解説のなかから、われわれのテーマに必要なことのみを要約しておこ

う。

木小屋は農家の屋敷内にある小屋で、農機具をしまったり、わら仕事をしたりする所であり、かつ、冬のあいだ若者たちにとってだんらんのある場所でもある。また農家の息子たちの教育の場でもある。この地方では、公認の若者宿には各農家の長男しか入れず、二男、三男にとってはこの木小屋が教育機関である。昔ばなしには(一) 家庭内伝承、(二) 村落共同体伝承、(三) 旅商人や季節労働者などによる伝承の三型態があるが、木小屋話は(三)に相当し、(二)を多少含む。そして若い農家の息子たちによって伝承される。つまり外部からの語り手からはなしを聞くと、それを木小屋のなかで語りついでいくうちにある独特の、若い男たちにふさわしいはなしとして形成していく。

そして村の若者は一五歳で木小屋に入る資格をえるので、彼らに対する教育が年長の者によっておこなわれる。それは仕事のうえでの教育でもあり、人生についての教育でもある。肝だめしもそのうちのひとつである。昔ばなしや伝説や、笑話を語ってきかせるのは娯楽でもあり、一種の教育でもあろう。村のなかで木小屋のもつこうした機能が、以下にみる教訓の面にも反映しているようである。

そこで語られる木小屋話は、大ざっぱに言えば、つぎのような特徴をもつ。テーマとしては目立ちやすいテーマを好む。例えば長手の伊佐など。内容的には地域的に限定されていて、若い男たちの世界にのみ通用するような笑いがある。文体的には完形昔話にふつうみられるような整ったものではなく、世間話ふうな文体をもつ。そしてわれわれのテーマである教訓についても、「蒜山盆地の昔話」における重層伝承的完形昔話の教訓とはことなつた特徴をもつことが観察される。

編者は計一四三話を一〇ジャンルにわけている。馬鹿聲話九話、愚か嫁話三話、狡猾者のはなし二九話、残酷なはなし一二話、化物ばなし九話、好色ばなし八話、和尚と小僧一〇話、長手の伊佐、佐兵ばなし三二話、世話ものの八話、因縁・縁起ものの二三話。

さてこれらのうち、教訓を決してもたないものがある。それは、馬鹿聲話、愚か嫁話、和尚と小僧、長手の伊佐、佐兵ばなし、好色ばなしである。さきに蒜山盆地からの資料の検討の際にも教訓を決してもたないジャンルを指摘した。それは、和尚と小僧型、佐治谷話、形式譚であった。和尚と小僧は両資料において共通して教訓をもたないこと

がわかるし、佐治谷話は木小屋話では馬鹿聲、愚か嫁話にほぼ相当する。これらのばあいには、第一章でのべたのと同様、はなしの内容、興味の中心が非常に明確にとりだされていて、教訓の入りこむ余地はないと考えられる。伊佐と佐兵のはなしでも事情は同じであろう。庶民のなかの英雄的人物の行状を、畏敬の念をこめて伝えるこれらのほなしでは、語り手も聞き手も、もう何度も聞いて知っている内容を、また語り、あるいは聞いて感嘆しようということにのみ気持が向いていて、さらにそこへ語り手が教訓らしきことばをつけたす必要もないし、余地もないということではなからうか。ここでもやはり、はなしは傑出した（良い意味でも、悪い意味でも）主人公の行状というカプセルのなかにとじこめられていて、教訓をうけつける可能性をもたないということができよう。好色ものが教訓をもたないことはわざわざ説明するまでもないだろう。

本書には一七人の語り手が登場して一四三話を語るが、なかで工藤六兵衛翁は六八話、全体の四八パーセントを語っている。つぎに近きよ姫が一九話、安部忠内一七話、以下、八話一名、五話二名、四話三名、二話一名、一話七名である。

工藤翁のレパトリーを観察すると興味あることに気づく。すなわち彼のレパトリーと、さきにあげた教訓をもたないジャンルとを重ねあわせてみると、教訓をもたない愚か嫁と、伊佐、佐兵ばなしは、工藤翁のレパトリーには入っていない。和尚と小僧型においても彼はたった一話しか語っていない。馬鹿狸では全九話中三話を語っているのみである。ただ教訓をもたない好色ものはまったく逆で、すべての類話を工藤翁のみが語っている。

以上のことについてただちに解釈に入る前に、工藤翁のレパトリー全体をみておこう。彼のみが語っている分野は前述の好色もの以外に世話ものである。ここでは八話を語って、うち三話で教訓をつけている。かりにこの割合を教訓率とよぶとすると、このばあい教訓率は三八パーセント。また、彼がほとんど語った分野は因縁・縁起もので、全二三話中、二一話を語っている。この二一話のうちで教訓をつけているのは六話、教訓率二九パーセント。工藤翁が全類話の半分以上を語っているのはつぎのふたつのジャンルである。狡猾者、全二九話中一八話、教訓率は六七パーセント。残酷なはなし、全一二話中六話、教訓率は六七パーセント。つぎに彼が全類話の半分以上を語っているも

のは、前述の馬鹿狸ばなしのほかには化物ばなし、全九話中三話、教訓率は六七パーセント。

さて以上の工藤翁のレパトリーと教訓に関する数的概観を一応念頭において、個々のジャンルについて考察を加えよう。

世話もの 教訓付三話いずれも工藤翁に由来する。

「行灯大工」「ねつくすると、ねつくしただけある。

粗相にするもんでないがったど。」

「行灯つくり」「ねつくするとねつくするほど、やっただけはあるもんだと。」

「大工のおかた」「親切なおかたというものは、そういうもんだったど。」

はなしの内容は、一見大したこともないようにみえても、心をこめてすることが大切で、そうやっていけば、いずれはひとと認めてくれるということであり、教訓と結びつきやすい性質のものである。いわば人生の真実を若い者に語ってきかせるもので、冒頭にもふれた如く、道徳的教訓と区別されるべき、真実教示的教訓である。そして、のちにみる化物ばなしでの教訓と比較するとわかることだが、こうした真実を語る教訓は、木小屋話のなかでも割に

高度な教訓であり、語り手の頭のなかでは、対象としては割合に年長の若者を想定しているかもしれない。はなしの内容と教訓とは一致している。それはこの種の教訓のばあいには必然的に要求されることであろう。

真実教示的であるということは、ことば使いのうえからも観察される。すなわち、「もんだと。」「もんだったど。」そしてその否定形としての「もんでないがったど。」はいずれも、「……ものである」といって、ひとがあまり気づいていないことを浮き彫りにしてみせ、かつ一般化しているのである。教訓的意志があきらかに感じられる。教訓と結びつきやすいこのジャンルをひとりですべて語り、かつ三八パーセントに教訓をつけていることと考えあわせると、工藤翁の語り手としての傾向がすでに感じられるのである。そしてその傾向が、既述の事実、すなわち教訓と結びつく余地のない四つのジャンルのうち愚か嫁と伊佐・佐兵はなしを彼は一話も語っていないこと、和尚と小僧は一話のみ、馬鹿狸は三話のみしか語っていないことと関係があるように思われるのである。

因縁・縁起ばなし 全二三話中二二話を工藤翁が語り、六話に教訓をつける。他の二話者は教訓をつけていない。

「猫とお観音さま」「人の気性ざあ、七五歳まで脱けないもんだけど。」

「お宮詣り」「親というものは、生きてる間、どこまでも子どもを案ずるもんだと。親というものは、ありがたいもんだと。」

「一生飯」横着はだめで「稼がれるだけ稼がんなねもんだと。」

「トロロ飯」「親子というものはそのぐらいに違うもんだと。」

「旅人と毒蛇」「人を助けっどきだって、人を見て助けんなねけど。」

「七福神」「こういう人みんなそろっていて、世の中は持っていかなねもんだけど。」

ここでもはなしの内容は人生の真実を語る体のものなので教訓と結合しやすい。そして教訓も「旅人と毒蛇」を除いてそれに対応して「……もんだ」型になっている。ここでの教訓の内容も化物ばなしにくらべ年長むきである。そしてその内容の多様性が注目をひく。この六編の教訓はいずれもべつべつの内容をもっており蒜山盆地の重層伝承的完形昔話の教訓とはまったく違った様相をみせている。

それはそれぞれの昔ばなしの語られる場の機能のちがいに
応じていると思われる。木小屋が村の若者たちの共同作業
所であるばかりでなく、男子としての教育の場であること
が、ここに強く反映しているといえよう。このことは以下
のジャンルについても言えることである。

「もんだ」という教訓の語尾も木小屋話と蒜山の昔ばなしとを区別するものである。「もんだ」についてはすでに
のべたが、そうした意味のことばは蒜山にはほとんどな
った。木小屋の教育機能の反映ということができよう。

「もんだ」の「ど」はやはり伝聞性ないしは間接的主
張を示すことばであろう。しかしどちらかというとこのば
あいは、伝聞的な形をとる間接的主張という面が強いよう
に考えられる。内容が人生の真実を説いて聞かせるもので
あるということは、前述の如く、対象としては若者のなか
でも年長の者を想定しているであらうし、そうであればあ
まりあからさまな説教調を正面に押し出すことは、はばか
られるのではないだろうか。そのことは後述の、化物ばなし
の教訓と比較すると理解しやすいように思う。

狡猾者のはなし 全二九話中一八話を工藤翁が語り、う
ち三話に教訓をつける。安部忠内六話、うち一話に教訓、

以下二話一名、一話三名。

「狐千匹」「んだから、とんでもないことはいうも
ないど。」

「こころあたりは屁くさい」「んだから、分んね者は
何させても分んねもんだど。」

「三匹の牛」「人さあ、あんまり横着たけるもんでな
いもんだけど。」(以上工藤翁)

「南瓜」「ほんじゃから南瓜棚あ、低いからなて、油
断さんねもんだぞ。」(安部忠内)

いずれも「もんだ」型である。しかしここでの「もんだ」
は、因縁・縁起ばなしのばあいのように、人生の真実をと
いった深刻型ではない。語り手は真面目に言っているに
しても、内容そのものがあまりたいした教訓ではないし、い
ささか笑話的ひびきをもっている。

ことば使いのうえからみると、工藤翁がここでも「……
もんだど。」と伝聞的間接主張の形を保っているのに対し
て、安部忠内のみは、「だぞ。」という直接的主張の形で
べているのが目立つ。内容自体も南瓜棚は低いからと油
断するなというきわめて日常的、世俗的内容である。その
ようなことを考えあわせると、この語り手にとってこのは

なしと教訓は、ごく世間話的な、日常的なものであって、ひとつの独特ななしの世界を語ってきかせるということとは縁遠いように思われる。若者に、自分の経験から直接的にひきだした教訓を語っているような気持で語っているのではないだろうか。

残酷ななし 全一二話中六話を工藤翁が語り、うち四話に教訓。二話を近きよ嬢が語り、うち一話に教訓。以下三名が一話ずつ語り、うち二名が教訓をつける。全体としての教訓率五八パーセント、工藤翁のみにしてみると六七パーセント。

「十分五分兄弟」 「んだから、馬鹿さつける葉さないっけど。」(佐藤宇之助)

「どうもところも」 「んだから、なんぼ名人でも、さんねものはさんねど。」

「じじと火箱」 「んだから、そんげなものにりんきなどするもんでないど。」

「長い名前」 (1) 「あんまり長い名前つけるもんでないど。」

「長い名前」 (2) 「んだから、あんまり長い名前は悪いもんだど。」(以上四篇工藤翁)

「長い名前」 (3) 「んだから、そがえな鹿馬な長い名前つけるもんでない。」(近きよ)

「長い名前」 (4) 「んだから、あんまり長い名、付けないど。」(高橋しのぶ)

「長い名前」 四篇の教訓は同じものだが、これは他の昔話集などでも「長い名前」にみられるところである。ことばのうえで、近きよのみが断定的、直接的に言っていることに一応注目しておこう。他はすべて「ど」を伴っている。

「じじと火箱」 「どうもところも」の教訓は年長の若者たちに対するものであろう。工藤翁はここでも「ど」をつけて語っている。

化物ばなし 全九話中三話を工藤翁が語り、うち一話に教訓。海老名ちやう嬢が三話を語り、うち二話に教訓。以下三名が各一話を語り、うち一名が教訓をつける。

「トーツポテンの化物」 「世の中さ、化物などいないもんだ。」(工藤翁)

「ドーデンボーの化物」 「んだから、化物なんて、恐ろしくなくないから、夜小便たれに行かんねて、いらね。」

「ちやうちんの化物」 「んだから、始末もしないで押

つけておくど、みな化物になって出はってくる。」

(以上二篇海老名ちやう壱)

「オンサローの化物」「んだから、世の中には化物な

どいなくて、さびしいなんてないもんだ。」(工藤勝助)
ここでの教訓はこれまでみてきたものとかなり異なった様相を呈している。それはまず内容について言うことができる。化物のはなしをしておいて、終わってから、ほんとは化物なんか居ないんだよ、というわけだが、これは、年少の若者たちを聞き手として予想していることを暗示している。教訓としては世話ものや因縁・縁起はなしにおけるそれよりも、はるかに単純である。

ことば使いの面でも特徴がある。すなわち、ここではどの語り手も、「ど」を使っていない。工藤六兵衛翁はこれまでみてきたどのジャンルにおいても、教訓は「……ど」で終えていた。それは彼に、語り手としての一種の風格を与えていたように思うが、この化物はなしにおいてはじめて、「いないもんだ」と直接的、断定的にのべている。それは彼がこのはなしを、日常的、世俗的なものと理解していて、この教訓もその同じ線のうえで、ごく普通に言いしかせたということなのではないだろうか。

そのようなことをこまかく詮索するのは、こうしたことのなかに、昔ばなしが語られる場の機能の反映を感じるからである。そしてさらに言うならば、語り手が、自分自身が管理している昔ばなしを、どのようなものとして感じているか、というその意識が、このような教訓の語り方のかにかすかにあらわれていると考えられるからである。

まとめ

ふたつの昔ばなし集を比較検討してきたが、こまかいことは各部分での記述にまかせるとして、大すじのまとめをしておこう。

この小論のはじめにみずから課した問題は、教訓は語り手の恣意によってつけられるものなのか、昔ばなしと一体となって伝承されるものなのかということであった。これまでの検討からみると、両方ともありうることであって、そのいずれになるかを決定するのは、昔ばなしが伝承されるその形態と、それが語られる場のもの機能——もちろんこのふたつは密接な関係にあるのだが——、そしてもうひとつはその昔ばなしのタイプなのではないかと考えられ

る。

この三要素がからみあって教訓の恣意性または伝承性がでてきたうえで、語り手の性格、好み、人生的背景が関与しうるかどうかがきまってくるものと考えられる。すなわち、伝承性が強いばあいには個人的要素はほとんど関与しえないようにみえるし、当然のことながら恣意的要素の入る余地があるばあいにのみ、個人的要素が加わりうるということである。そして個人的要素が加わりうるばあいには、その程度はかなり強いということもいえるであらう。

〔注〕

(1) 二ないし三話の採集

- 一八番 難題算(イ) 二話
- 二三番 蛇算入 二話
- 二五番 蛙算入 二話
- 二九番 まま子と鳥 二話
- 三五番 横着者の出世 二話

〔付記〕

- 三八番 大歳の福の神 二話
- 四一番 笠地藏 二話
- 四六番 食わず女房 二話
- 四八番 化け物寺 二話
- 五二番 舌切雀 三話
- 五九番 蛙の恩返し 二話
- 六二番 似せ本尊(あ) 二話
- 六四番 炭焼き面飯 二話
- 六七番 天狗と博打うち 二話

本稿は一九七四年六月ヘルシンキ市で開かれた国際口承文学学会 (International Society for Folk-narrative Research) の第六回世界大会において発表したものになった原稿である。

「蒜山盆地の昔話」の細部について御教示いただいた、編者のひとり、稲田浩二氏に謝意を表したい。